

地域子育て支援拠点研修事業「高知開催」

みんなあで考えよう 地域の子育て・親育ち

＜開催概要＞

- 開催日 2009年7月18日(土) 9:45～16:00
- 会場 高知市文化プラザ かるぽーと
(〒780-8529 高知市九反田2-1)
- 主催 財団法人こども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・高知県・高知市
- 協力 地域子育て支援拠点研修事業「高知開催」実行委員会・NPO法人わははネット
- 参加者数 参加者合計240名(男性 38名 女性 202名)
(行政 102名 NPO任意団体 77名 他団体・企業 10名 その他 51名)

＜開催趣旨＞

平成19年度より、つどいの広場事業、地域子育て支援センター事業を統合し、児童館などのスペースも活用しながら、地域子育て支援拠点事業(ひろば型、センター型、児童館型)が新たに再編されました。そこで、行政とともに地域における子育て支援拠点間のネットワークを図りながら、地域子育て支援拠点の意義と役割を検証します。また、拠点スタッフ一人ひとりが日頃の活動を振り返り、見識を深め、スキルアップに寄与することを目的とします。

＜プログラム趣旨＞

高知県には、子育て支援拠点事業が35箇所(センター型 33・ひろば型 2)開設・運営されているとともに、サロンやサークルなど保護者の自主的な集まりや、支援グループの子育てに関する支援活動がおこなわれています。

本セミナーでは、支援者、各種団体、行政の方々とともに地域子育て支援拠点の目指すべきあり方を考えるとともに、連携しながら「地域に根ざした子育て支援」を推進するために子育て支援拠点の現状を把握し、原点に立ち返り、意義と役割について確認することを目的とします。

＜開会挨拶＞

主催者挨拶 財団法人こども未来財団 研修事業部 押本篤良さん

開催地祝辞 高知県知事 尾崎正直さん(司会者代読)

開催地挨拶 高知市福祉事務所長 藤原 好幸さん



押本 篤良さん



藤原 好幸さん

◆プログラム1 基調報告 10:00～10:30

「地域子育て支援事業の概要と展望」

厚生労働省雇用均等・児童家庭局 総務課少子化対策企画室 朝川 知昭さん

すべての乳幼児の子育て家庭を対象とした、地域子育て支援拠点事業は、今年度より第2種社会福祉事業となりました。

核家族化の進行・地域のつながりの希薄化・子どもが少ないので近くに子どもがいない環境であることから、子育てが孤立化し、子育てが負担に感じている割合が多くなっている。各種データをもとに、わかりやすくお話をいただきました。

また、児童福祉法改正の内容として、乳幼児期すべての子どもへの支援事業が整備されていること、政府全体で少子化に取り組んでいる社会保障の機能強化の工程についてお聞きました。次世代育成支援行動計画としては、22年度からの5年間、すべての子育て家庭に合うよう点検していく作業がされていくそうです。

その中で、全国どこでも歩いていける場所に子育て拠点施設があることを目標にしているということで、すべての家庭を対象に早い段階で子育て家庭が出会う公的なサービスをうけることができるよう考えられていました。また、様々なニーズに応じた多様な支援に結び付けていく窓口として、私たちの活動の重要性を学ぶことができました。

30分という短い時間でしたが、行政の方より国がどのように取り組んでいるのか直接聞くことができたので、有意義な時間となりました。

◆プログラム2 ミニ講演&対談 10:30～12:00

ミニ講演 「子育て支援拠点に期待される機能と役割」

関西学院大学教育学部専任講師 橋本 真紀さん

親と子・親子の集団が対象となる地域子育て支援拠点事業は、地域において、親子の交流を促進する場、機会の提供を行う場であるとお話をありました。

親子を取り巻く社会的背景として、昔は、回りに子どもをみる目があり、子どもを支える手があった。しかし、今は、周囲に人がいなくなり、子育てに向けられる視線が強くなっている。誰かに子育てを見られている！評価されている！と感じられるようになったそうです。そこで、この時代の社会に合った、家族の機能を支える仕組みが重要であるとのことでした。



橋本 真紀さん

支援者の役割として、来る人を受け入れ、関係を作っていくことで、安心・安全の場を提供し、地域に参加していく親子の育ちを支える拠点となる必要がある。支援をするということで、プレッシャーをかけず支援できることを考えていく必要があります。

地域の入り口となり、子どもや親の生活圏を豊かにしていくという流れが、自然にできるようになる重要性についてお話をありました。

対談 「子育て支援拠点に期待される機能と役割」

コーディネーター

関西学院大学教育学部専任講師

橋本 真紀さん

対談者

NPO法人びーのびーの理事長

奥山 千鶴子さん

海津見保育園地域子育てセンター長 鳥居 淑子さん



奥山 千鶴子さん 鳥居 淑子さん

高知県の子育て支援センターでは、地域の特性を生かして、試行錯誤しながらの活動を行っている現状をもとに、鳥居さんからのお話と質問、奥山さんの活動についてのお話がありました。

鳥居さんより、「行政や地域を巻き込んで活動していくにはどのようにしていくのか?」という質問が出ました。奥山さんより、いろんなアイデアを出すことや、一緒にやってみることの大切さについて具体的な事例を挙げながらお話をいただきました。価値観が違って当たり前、「やってほしい」と思うだけでなく一緒にやってみる必要があるとのことです。

子育て支援の活動の中で、親だけでなく、多くの人との出会いいや交流、経験を通して子どもを育てていく。子どもにとっての「ふるさとつくり」をしていく。という言葉が印象に残りました。私たちの心の中にある「ふるさと」を子どもにも同じように感じさせていきたい!と心が熱くなりました。



◆プログラム3 分科会 13:00～15:30

第1分科会 「地域の中での子育て支援拠点の役割とは」

【コーディネーター】

関西学院大学教育学部専任講師

橋本 真紀さん

【事例報告者】

◎日高村役場健康福祉課 主幹 日高村地域子育て支援センター 森下 美和さん

◎NPO法人はるの・わくわくぼけっと 理事長 西村 佳子さん

◎助任保育園主任保育士 地域子育て支援センター担当 井上 和恵さん

実践の中で子育て支援拠点がどのような役割をはたしているのか、3人の事例報告がありました。



森下さんからは、日高村地域子育て支援センターの事業内容や日高村の現状、子育て・保健・教育・医療との連携について報告があり、例をあげてどのように連携がとられているかお話がありました。

森下 美和さん

西村さんは、NPOを立ち上げるに至った経緯や大切にしていること、保健師さんや地域との連携についてお話がありました。ひろばでつながった人たちが地域へ帰って、そこでまたつながりをひろげる、ということを大切にしており、子育てしやすい地域づくりをしていきたいということでした。



西村 佳子さん



井上さんは、助任保育園における子育て支援の始まりから現在に至るまでや取り組みについて、これからの課題などお話がありました。

井上 和恵さん

橋本さんから、行政の中での支援センター・NPOの支援拠点・保育所内の支援センターという3人の報告に共通するのは「ほっとできる」ということ。ほっとできるように心がけるというのが役割ではないか。と、お話があり、ここから具体的な配慮について伺いました。



森下さんは、お話を聞く・笑顔で受け入れる・聞きたいことも突っ込みすぎず少しずつ入り込んでいくようにしている。また、どうしたらいいか聞かれた時、無理のないアドバイスをするようにしている、とお話がありました。

西村さんは、子育ての大変さを痛感しているので実家に帰ってきた気持ちになってもらえるように、来た人は甘やかしてあげたいという気持ちでいる。でも、来ている人は自分でする力を持っているとお話がありました。

井上さんからは、電話相談を受けることもあり、相手の顔が見えないので、一言の影響力にも配慮し、相手の思いを聞き、受け入れるようにしている。などのお話を伺いました。

=====

～参加者から～



・保育所併設型支援センターで1年目から保健師さんとつながることができた。

・臨床心理士などとのネットワークはないが、発達の気になる親子への対応について教えてほしい。
⇒専門知識が必要なので、保健師や行政と一緒に学ぶ機会を持ってみてはどうか。助言をもらいながら関わられる専門家との関係も大切。

⇒お母さんの思いをゆっくり聞くことで、お母さんの中でも整理されてきて自分から相談しようと思えるようにしていく。プロの援助が必要だが、それだけでなく日常生活に対応する人の一人として側にいれたらと思っている。

第2分科会 「行政と子育て支援拠点の連携・協働のあり方について」

【コーディネーター】

NPO 法人びーのびーの理事長

奥山 千鶴子さん

【事例報告者】

◎ 高知事例報告

高知県産業振興推進部地域づくり支援課 地域支援企画員

北村 俊幸さん

子育てサークルピッコロ 代表

福本 かおりさん

◎ 高松市事例報告

高松市役所こども未来課 係長

久保 久美さん

子育てネットひまわり 代表

有澤 陽子さん

【コメントーター】

厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室

朝川 知昭さん

奥山さんからは、「なぜ、行政と市民団体や当事者との連携・協働が必要なのかこの分科会で考えていきましょう」とのお話がありました。

行政だけでは、当事者に必要な子育て支援をすることは難しく、親だけでは子どもを育てることが難しい。地域の中では人は育つもの。協働することで、当事者のニーズを施策に結びつけることができ、子育て支援をする人の育成にもつながり、地域の子育て支援力が養われる循環がていくということでした。



朝川 知昭さん

奥山 千鶴子さん



福本 かおりさん

福本さんからは、安芸市において子育てサークルピッコロが設立されるまでの経緯と現在の活動報告、地域支援員や安芸市との連携についての報告がありました。

北村さんからは、高知県地域支援企画員制度の概要と、行政と子育てサークルをつなぐ潤滑油としての働きについてのお話がありました。

忙しい行政・保健師などに、子育て支援に関するイメージを与え、子育て支援をする当事者団体とをつなぐためには、潤滑油・仲介役となるポジションが必要であるとのことでした。



北村 俊幸さん



有澤 陽子さん

有澤さんからは、子育てネットひまわりにおいて、つどいの広場を受託するまでの経緯と行政との連携・関係性(パートナーシップ)についてのお話がありました。



久保 久美さん

久保さんからは、高松市のプロフィールと 5 年前に「こども未来課」が発足した当時のお話、この 5 年間に 0ヶ所だったつどいの広場を 6ヶ所に増設した経緯、子育て支援拠点事業は直営ではせず、すべて NPO や社会福祉団体等と協働で実施することの意義などをお聞かせいただきました。また、高松市独自のとりくみとして「子育て総合情報発信事業」「こども未来ネットワーク会議」などネットワークとしての連携や協働の大切さについてのお話がありました。



～参加者から～

- ・高知県にはつどいのひろばはなく、子育て支援センターの担当者に任された保育士は何をしたら良いのか、また支援にかけられる予算も知らされていないのが現状。勉強会もできず、うまく機能していないと思う。
- ⇒高松ではこども未来ネットワーク会議において行政側から新しい施策を知らせ、関係者同士が課題・問題点を協議検討している。
- ⇒高知県でもこのセミナーを契機にこのようなネットワークを作っていてほしい。

第3分科会 「さまざまな家庭を広場で受け入れるための連携や工夫」

【コーディネーター】

高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部教授

稻富 真彦さん

【パネリスト】

◎ 高知中央西福祉保健所健康障害 母子児童チーフ

西山 優史さん

◎ 香川こだま学園 臨床心理士発達障害窓口

池内 香さん

◎ NPO法人子育てネットくすくす 理事長

草薙 めぐみさん

西山さんから、高知県中央西福祉保健所の概要紹介がありました。

児童相談を受け、非行のあった子どもが更正したあとに母から幼児期の家庭背景を聞くことがある。子育てを知る・学ぶ機会が少ないと感じ、ひろばのような場所の必要性と、その連携をしないとグレーゾーン家族がみつかりにくいということでした。

いわば同心円(ひとつの援助機関)ではなく橿円型(複数の援助機関が重なりあう)子育て支援が求められている時代であるということでした。



西山 優史さん



池内 香さん

池内さんから、香川こだま学園の概要紹介がありました。

昨年3月からつどいのひろば連絡会を開催し、各ひろばに巡回を開始することになり、連携事例の報告やその後の様子について報告をしていただきました。

もし発達障害が疑われる子どもが見つかった場合、

①保護者との信頼関係作り。

②専門機関を紹介するための投げ掛け。

保護者がひろばの中で大事にされている、守れているという思いをもてるかどうかがポイントであるということです。

障害があるとわかっている場合は、ひろばの役割としては保護者を支え、その子の「よさ」や「進歩」「成長したところ」保護者に伝え、もし診療を拒否されても、引き続きひろばは寄り添える環境作りを大事してほしいということでした。

草薙さんから、子育てネットくすくすの概要と善通寺市の地域の特性、子育て支援の資源の紹介をしていただきました。

住んでいる地域の資源をしっかり知っておく必要があり、市子ども課との連携では、月1回の定例会や日常的な情報交換、相談支援については、保健師、助産師、コーディネーターと3人で子育て家庭に訪問、付き添い支援も行っているということです。その他にも地域の小児科医との連携や、乳幼児健診で広場を待合室として開放し、親子で遊びに来られる場所が身近にあるのだという資源につなげるなど多数の機関との連携をされています。すべては「顔と顔とのつながり」から始まっています。



草薙 めぐみさん

～参加者から～

・同心円と橿円型との違いは？

⇒同心円は1つの機関。橿円型は複数の機関が連携し合う。そして小学・中学生と、時間の経過に合う支援が出来るように次世代育成支援に反映させなければならない。



稻富 真彦さん

・一人の子どもを複数の機関が連携する上で、個人の記録は必要ですか？

⇒ひろばについては、スタッフの負担がなく様子がわかる程度で十分。あとは直接職員が聞きます。

⇒最初に相談をする時は、子どもの家庭環境、様子、対応などを記載したものを提示してもらうとスムーズにいくのでは。



・ひろば利用の気になる子がひろばを卒業したあと、幼稚園などの連携の様子を教えてください。

⇒世帯登録なので、下の子がひろばを利用している場合、気になる母の見守りができる。

善通寺市が個人情報の管理のもと情報開示を行ってくれるので、他の機関との情報交換、見守りなどの支援が可能。個人情報が厳しい中、「誰のためにやっているのか」がきちんとすれば支援ができる。市との信頼関係も大切。

⇒DVや虐待は一般市民も通報の義務がある。各市町村は昼間こどもの人権を預かる施設・機関は、擁護対策支援などの法的支援が必要ではないか。

◆プログラム4 全体会(分科会の報告)15:30～16:00

【コーディネーター】

NPO 法人わははネット理事長

中橋 恵美子さん

◎第1分科会報告

宿毛市教育委員会所属スクールソーシャルワーカー 近澤 ゆみ子さん

◎第2分科会報告

とさし子育てネットワークたまごくらぶ 福島 幸子さん

◎第3分科会報告

高知県中央西福祉保健所健康障害課主事 母子児童担当 西村 美香さん

各報告者から、分科会の報告がされ参加できなかった他の分科会の様子を知ることができました。どの分科会からも機関や行政、人と人とのつながりが大切ということが共通の意見として報告されました。

予定参加人数を大幅に超える方々の参加がありましたが、高知県内で地域子育て拠点をテーマにした研修会は今回が初めてということもあり、参加者も子育て支援センター職員、NPO、行政、民生委員など様々な人たちが集まることができ情報交換など行うことができました。



福島 幸子さん



近澤 ゆみ子さん

今後はこのような研修会が定期的に必要であるとの認識もあるようで行政と協働して研修会や交流会を開催し高知の地域子育て支援の底上げにつなげていくことができそうです。



西村 美香さん